



高専入試 / 高専のための学習塾

ナレッジスター

二〇二三年度高専入試対策

第四回 高専模試

国語

(配点)

①

12点

②

25点

③

31点

④

32点

(注意)

- 1 解答を戻す際には必ず画面下の「戻る」ボタンから戻るようにしてください。
その他の方法で戻ってしまうと、今までの解答が消えたり、
再度パスワードを求められる場合があります。
- 2 問題冊子は受験開始するまで開かないこと。
- 3 問題冊子には必要に応じて印刷し、手元において受験すること。
- 4 試験時間は五十分です。時間は自分で計って受験し、時間になったら解答を送信してください。
- 5 一つの解答欄に対して、複数のマークを塗りつぶしている場合は有効な解答にはなりません。
- 6 回答は、解答用紙の指定されたマーク欄にマークすること。
指定されたマーク欄以外にマークしても有効な解答となりません。



1 次の(1)から(6)までの傍線部の漢字表記として適当なものを、それぞれアからエまでの中から一つずつ選べ。

- | | | | | | | | | | |
|----------------|-----|-----|-----|-----|------------------|-----|-----|-----|-----|
| (1) アイ悼の意を表す。 | ア 愛 | イ 相 | ウ 哀 | エ 藍 | (2) 調査の対シヨウとなる。 | ア 照 | イ 称 | ウ 象 | エ 性 |
| (3) 神社の境ダイに入る。 | ア 代 | イ 台 | ウ 中 | エ 内 | (4) カ程を修了する。 | ア 課 | イ 過 | ウ 科 | エ 仮 |
| (5) 週カン誌を読む。 | ア 慣 | イ 間 | ウ 刊 | エ 観 | (6) カイ心の笑みを浮かべる。 | ア 会 | イ 改 | ウ 回 | エ 介 |

2 次の文章を読んで、後の問いに答えよ。(なお、「源氏物語」の本文のあとには、「」で現代語訳を補ってある。)

旧版「漱石全集」第十二巻(新版では第十七巻)に、(注1)漱石の全俳句が収録されている。まず、(注2)子規が漱石と「須磨の巻」について語り合った明治二十八年の秋以降の作品を見てみよう。『(1)源氏物語』に關係する俳句がないだろうか。

すると、「正岡子規へ送りたる句稿 その三」とある一連の俳句(明治二十八年の「十月末」と明記されている)の中に、

(2) 時鳥たつた一声須磨明石

という漱石の句が発見できる。作成時期から見ても、明らかに子規の「(注3)読みさして月が出るなり須磨の巻」の影響を受けている。子規が褒めた『源氏物語』須磨の巻とその次の明石の巻を、漱石も新たな感慨をいだいて読んでみたのだろう。

しかし、なぜ「時鳥たつた一声」なのか。子規が感動したという「八月十五夜」の場面では、時鳥ならぬ「雁の鳴き声」が印象的であるのに。その部分の原文を引用しておこう。

沖より舟どもの(3)歌ひののしりて漕ぎ行くなども聞こゆ。ほのかに、ただ小さき鳥の浮かべると見やらるるも心細げなるに、雁の連ねて鳴く声、楫の音に紛へらるるを、……

「沖を通じて幾つも船が A 漕いでゆく音なども聞こえる。船の影がかすかでただ小さい鳥が浮んでいるかのように遠く見えるのも心細い感じであるうえに、雁が列を作って鳴く声が船の楫の音によく似ているのを、……」

「時鳥たつた一声須磨明石」という漱石の俳句のおもしろさは、何よりもこの句が子規に送ったものであることだ。なぜなら子規という俳号が「ほととぎす」時鳥を意味しているからである。「時鳥たつた一声」というのは、(注4)松山で正岡子規とせっかく再会したのに「ほんの短い会話」しかできなかった、けれどもその時『源氏物語』の須磨の巻に触発された子規の句稿を見せられたのだったなあ、という漱石の懐かしい気持ちを感じているのだ。「須磨・明石」の二つの巻を熟読してみたなら、鳴いていたのは「ほととぎす」ならぬ「雁」だったけれども、自分は子規(ほととぎす)との短い会話を果たした、というオチである。

(中略)

もう一句、漱石は『源氏物語』須磨・明石の巻の(4)本歌取りを作っている。明治二十九年七月八日の日付がある「正岡子規へ送りたる句稿その十五」の中に含まれている。この時、漱石は既に松山中学を去って、熊本の第五高等学校の教師に転じている。

涼しさの闇を来るなり須磨の浦

「涼しさの」の「の」は、Bを示す「の」であり、「涼しさ」が無生物Bなのだろう。「涼しさが暗い闇の中を伝って、この荒涼とした須磨の浦までやって来ることだ」というのが、句の大意だと思われる。

(島内景二『文豪の古典力』より)

(注1) 漱石⇨夏目漱石。明治・大正時代の小説家。

(注2) 子規⇨正岡子規。明治時代の俳人・歌人で、漱石の友人。

(注3) 読みさして⇨本を読むのを途中でやめて。

(注4) 松山⇨愛媛県の県庁所在地。正岡子規の出身地。

問1 本文中、『源氏物語』の作者として正しいものを、次のアからエまでのの中から一つ選べ。

ア 藤原定家 イ 菅原孝標の女 ウ 紫式部 エ 清少納言

問2 本文中、(2)時鳥たつた一声須磨明石の俳句について、次の各問いに答えよ。

① なぜ漱石は「時鳥」を表現に加えたのか。その理由として最も適当なものを、次のアからエまでのの中から一つ選べ。

ア 「雁」の存在よりも子規の方が大切であることを表すため。

イ 「雁」よりも「時鳥」の方が縁起の良いと考えたため。

ウ 子規と再会した思い出を印象的に表すため。

エ 子規との縁の深さをより世間に知らしめるため。

② 「たつた一声」とはどういうことを表しているか。その説明として最も適当なものを、次のアからエまでのの中から一つ選べ。

ア 子規と初めて出会ってからほんの短期間しか経っていないということ。

イ 子規と話す時間にはいつも何かしらの邪魔が入ってしまうということ。

ウ 子規と話したいことがあるのに、またしばらく会うことができないということ。

エ 子規と再会したのに、少ししか話をするのができなかったということ。

③ この俳句全体の内容を説明した文章として最も適当なものを、次のアからエまでのの中から一つ選べ。

ア 子規が薦めた『源氏物語』を読んだことを一刻も早く子規に伝えたいという思いが膨らんだ漱石の、子規との再会への期待を詠んだ歌。

イ 子規が『源氏物語』について流暢に語る時間はあつたという間であつたことから、漱石が感じる子規の教養の深さへの尊敬を詠んだ歌。

ウ 子規の褒める『源氏物語』を読んで同じように感動し、短時間の再会でも気の合う貴重な友人への懐古心を詠んだ歌。

エ 子規が感動したという『源氏物語』を読んだことで、子規と再会した出来事を思い出し、その懐かしさを詠んだ歌。

問3 本文中に(2)歌ひののしりてとあるが、この部分の現代語訳にあたる空欄 A に当てはまる言葉として最も適当なものを、次のアからエまでのの中から一つ選べ。

ア 大声で歌いながら イ 酒を飲みながら歌って ウ ゆっくりと歌いながら エ ささやきながら歌って

問4 本文中に、(3)本歌取りとあるが、この技法の説明として最も適当なものを、次のアからエまでのの中から一つ選べ。

ア ある特定の言葉を導くために決まった表現を使って作品を作る手法。

イ 有名な古歌の言葉や発想を取り入れて新しい作品を作る手法。

ウ 題材として各国の名所を取り入れ、その地特有の作品を作る手法。

エ 同音異義語を用い、表現の内容がより豊かな作品を作る手法。

問5 本文中の空欄 B に当てはまる言葉として最も適当なものを、次のアからエまでのの中から一つ選べ。

ア 主語 イ 付属語 ウ 体言 エ 修飾語

3 次の文章を読んで、後の問いに答えよ。

現実と情報が混沌としている時代に生きてみると、誰にとっても非常にむずかしくなっていくのは、人格形成、あるいは自己形成ということです。へ a へ、自分にはなにかであるかを自分で確認しながら、その確かめられた自己を自ら育て、保っていくことがむずかしくなってくるのです。「自分が自分であること」——昨日も今日も、変化しながらも変化せずに、私が同一の私であることを自己のアイデンティティーといいます。その(1)アイデンティティーを形成していくことが現代ではたいへんむずかしくなっているわけです。

いったい、今も昔も、われわれが自分の人格を作りあげていく場合、何が中心になるかというと、それは現実経験のほかにはありません。自分の環境、つまり、自然環境はもちろん、家族から国家社会といったものにかかわり、それを努力を通じて確認していく、その(2)外界の経験がとりもなおさず、自己の形成に役立っているわけです。

趣味の世界で、山登りをしたり探検をすることも人格形成に役立つといいますが、その場合も、現実の厳しい経験、未知なるものが突然現れる驚きが、自己のアイデンティティーを作りあげているわけです。それはたんなるイメージとは違って、頭の中の経験ではなく、肉体の中へ深く刻みこまれるような全身的な体験ですが、今日、そういう経験はなくなったといわないまでも、しだいに減りつつあることは事実でしょう。

へ b へ 現代の青年たちは学校を卒業するときにも、かつての青年ほどは希望も不安も感じないはず。なぜなら彼らは、自分たちの将来についてあまりにも情動的、観念的に知り過ぎていたからだ、とよくいわれます。実際テレビをみれば、サラリーマン生活がいかに味気なく、夢も希望もないものであるかを青年たちに見せてくれます。よしんば将来に希望があるとしても、たかだかこれくらいのもので、人生は六十年働くと、消しゴムの屑ほどの成果をつかんで定年退職するものだというような、いわば、A をくくったような、シニカルで軽薄な情報が大量に与えられているのです。いいかえれば、青年たちはせっかく実人生の舞台に踏み出したときには、なにか一度 B のすんだお芝居をやっているような、索漠たる思いを味わう恐れが強いのです。

また、冒険などといっても、このごろは昔の冒険と違って、ほんとうになまなましい現実にいきなり触れるというのではなく、多かれ少なかれ、その全貌が冒険家

に予告されています。昔のアムンゼンが北極や、南極へ出かけたあの旅行と、現代のアストロノートが月の世界へ出かける旅行とは、どちらが本当の冒険であるのか。なるほど、量からすれば月の旅行のほうが大きな規模を持っていますが、月へ行くまでのプロセスはあらかじめ電子計算機の中に組み込まれており、若干それが組みそこなった部分にだけ冒険があるといわざるを得ません。犬を連れて、橇そりに乗って、身体ひとつで南極や北極へ行くことのほうが、じつは新鮮さ、驚きという点においては月旅行よりも大きな冒険であったと言えましょう。

さらに、人格を形成していくための重要な場所として、かつては技術の修得が今日よりもはるかに重い手応えを持っていました。現在も技術の修得が人間を作っていることは事実ですが、へ、c、これもまた、残念ながらその重さの点で戦線を縮小しつつあるといわなければなりません。たとえば、昔は大工さんになるためには一生の努力を必要とするといわれたもので、私のうちへ時たま来てくれる大工さんは三十年のベテランですが、そういう人が、「大工というものは一生修行ですよ」と今でもいっています。しかしその後彼は頭をかいて、「⁽³⁾ 今どきこんなこといっていると、時代からとり残されますがね」とつけたすのです。

というのは、現代では技術そのものが現実体験ではなくて、情報化された一種の知識の組み合わせになっていて、その分だけたいへん修得しやすいかたちに変わっているからです。早い話が、板というものを一枚を取り上げても、昔の板は人間が鉋かんを握って、その鉋を動かす自分の腕を通して体験する本当のものでありました。しかし、現在の板はほとんどが合成樹脂で、鉋や手は必要ではなく、いわば、人間の目さえあればそれで用のすむ存在になりつつあります。一枚の板がものであることをやめて、しだいに板のイメージ、すなわち一種の情報になりつつあるわけです。

そうになると、それを扱う個人の技術はいちじるしく単純化されて、肉体に触れる体験の領域が小さくなって来ます。今日、技術の修得は一生の仕事だという人は、だんだん少なくなり、だいたい免許証をもらえば、技術はそれで完全に修得されたことになっています。料理人や理髪師、自動車の運転手に学校教師、すべて免許証をもらえば、彼にとつて職業および技術の修得段階は終わりだという意識が広がっています。現に、それさえ持っていればまず最低限度の生活はできるわけですが、その代わり、その技術をさらに伸ばして、彼独特の技術にする楽しみもなくなりました。なぜかという、近代の技術というものは、そのもうひとつの特色として、⁽⁴⁾ 相互の交換が可能であるということが大切な要素になっているからです。

ある一人の名人がいて、ぼろぼろのトラックをなんとか動かしてみせるというような技術は近代では必要などころか、あつては有害だと考えられています。トラックというものは、いかなる運転手でも動くような機械でなくてはならないので、天才的な運転手がやると動かせるトラックなどというものは、現代では有害なのです。つまり技術の修得が短期間の知識の修得になる一方、人間そのものが交換可能な知識の体系に変わったわけで、いいかえれば、人間存在そのものの知識化と非実体化、すなわち情報化が進んでいるといえるでしょう。

職業のことをドイツ語ではベルーフといいます、ベルーフとは「神の呼び声」という意味です。日本語にも「天職」ということばがあるわけで、職業とは食うために勝手に人間が選ぶものではなく、最終的には運命か、あるいは神が人間をそこへ呼びこむものだ、という考えが伝統的にありました。それほど職業には神秘的といつてよいほどの重みがおかれていたのですが、そのひとつの理由は、人間が職業訓練の中で意識的な知識以上のものを獲得する、という事実ではなかったでしょう。ものに触れる体験というものは、たんなる知識の学習とは違って、人間が自分で意識できない自己の部分を豊かにします。鉋で板を削って十年、二十年を過ごすということは、彼の肉体の思いがけない部分をふとらせることもあるし、「職人氣質」などという、いわくいい難い精神の部分を養うこともあります。じつは、人間の個性とはそうした無意識なものの集積として生まれるものであり、この部分こそ個人の中で真に交換不可能な要素だといふべきでしょう。

これに対して、現代の現実が情報化していくことは、いいかえれば、現実のすべてが知識化していくことであり、その内部の意識を超えた部分が消滅しつつある、ということだといえるでしょう。そして、それにつれて、現実とかかわる人間もまた情報化され、肉体も気質も持たない観念的な存在に変質しつつあるわけ

です。ひとつの中心を持ち、有機的な統一を持った「私」としての人間が解体し、巨大で、しかし全体像の見えない、⁽⁵⁾ 奇妙な機械の部分品になりつつあるのが現代だと見るべきでしょう。

(山崎正和『混沌からの表現』より)

問1 空欄〈a〉、〈b〉、〈c〉に入る語として最も適当なものを、それぞれ次のアからエまでのの中から一つずつ選べ。ただし同じ語は二度入らない。

ア しかし イ では ウ たとえば エ つまり

問2 本文中、空欄 A B に当てはまる言葉として最も適当なものを、それぞれ次のアからエまでのの中から一つずつ選べ。

A ア はら イ きも ウ いし エ たか

B ア ユートピア イ リハーサル ウ トレード エ ノスタルジー

問3 本文中に、⁽¹⁾ アイデンティティーを形成とあるが、アイデンティティーを形成するための行動として最も適当なものを、次のアからエまでのの中から一つ選べ。

ア 青年がテレビを見る。 イ 大工が鉋を動かす。 ウ 仕事人が免許証を取得する。 エ ある名人がぼろぼろのトラックを動かす。

問4 本文中に、⁽²⁾ 外界の経験とあるが、その内容の説明として最も適当なものを、アからエまでのの中から一つ選べ。

ア 努力をもって、家族や社会といった自分の身の回りの環境へかかわっていく経験。

イ 山登りや冒険のような趣味に生き、外界のつながりに一喜一憂する経験。

ウ 厳しい現実に向かいながらも、その驚きや感動を他者と共有する経験。

エ 頭の中で描くイメージを忠実に再現し、他者との遭遇にも適切に対処する経験。

問5 本文中に、⁽³⁾ 今どきこんなことになっていると、時代からとり残されますがねとあるが、なぜこのように言うのか。その理由の説明として最も適当なものを、次のアからエまでのの中から一つ選べ。

ア 人格を形成するための技術の修得は、最低限度の生活ができれば良いという若者の意識によって簡易化されているから。

イ 一生の努力を要するはずの技術の修得は、科学の進歩に基づく知識の情報化によってデジタル化されてきたから。

ウ 肉体に触れる体験の領域が狭まってきたことで、実際の働きかけなしに免許証を取得することが可能となってきたから。

エ 技術そのものが一種の情報となりつつあることで個人の技術が単純化され、技術の修得が容易となったから。

問6 本文中に、⁽⁴⁾ 相互の交換が可能とあるが、この部分の説明として最も適当なものを、次のアからエまでのの中から一つ選べ。

ア テクノロジーの発達により知識が単純化されたことで、以前より格段に次世代への技術踏襲が容易となっているということ。

イ 情報化によってどの技術も単純な作業と同様となっているため、これらの修得に年齢や性別など人間の属性を問わないということ。

ウ 技術の修得は情報化された知識の修得と同義となっているため、同様の技術を持っていれば仕事が可能という代わりという事実。

エ 技術の修得が一生の努力を要するものから短期間で修得可能なものに変容したことで、他の分野へ応用しやすくなったということ。

問7 本文中に、⁽⁵⁾ 奇妙な機械の部分品とあるが、この部分の説明として最も適当なものを、次のアからエまでのの中から一つ選べ。

ア 肉体も気質も持たない観念的存在に変質しながら、現実と関わる人間そのものの個性が社会の中で肥大化していくということ。

イ 人間そのものが、知識化されることで意識を超えた部分の消滅した観念的存在に変容し、解体されてしまうということ。

ウ 人間は、職業訓練の中で意識的な知識以上のものを獲得することで、無意識的な個性の集積となっていくということ。

エ 人間そのものが情報化され、精神の部分が解体されたとしても、有機的な統一を持った「私」は確かに存在し続けるということ。

4

次の文章を読んで、後の問いに答えよ。

三軒先の母の家へ夕食のお総菜を届けに行った。母の居間にお客様が見えている。

玄関の電気が付いていなかった。それは暮れる前に訪ねてきたお客様で、母と互いに話し込んでいるということだ。お茶を新しく淹れ直して持って行った。私を見た母は、上気した顔で立ち上がり、

「丁度よく玉子が来ました。あんたご挨拶しなさい。友兄さんが見えたのよ」

話に聞いたことはあったが、顔を見るのは初めて、父の次兄で友之助という。母より十位上で、瘦身小柄白髪だが、血色がよく、しっかりしたお年寄りだった。母の様子から見れば心配することはなさそうな訪問らしい。私を見るなり友兄さんは「慌ててポケットからハンカチを出して目を押さえてしまった。」

「ああ幾ちゃん、玉子ちゃんがこんなに」

夢中になってそこに居ない私の父に話しかけずにはいられないらしい。落ちつくまで間があった。その間に母は「かいつまんで話した。」

友兄さんの奥様が先頃亡くなられ、納骨のため三橋のお墓を近く開ける。昔のことは何ともしがたいが、もし、母や私が望むならば、私の父の分骨を計ってあげようかという申し出だ。

減多なことで墓所を開くことはない。今、自分はそれをする立場に居るが、この折を過せば、再びそれを考えることは難しいと。

母の離婚後、五十年近くたって三橋側からの話であった。一度納めたものを動かすことは考えないが、私達がお参りをすることが出来れば何よりだった。

話の間中、⁽²⁾ 友兄さんは私を見続け、感情の糸は弱くゆるんで締める力を失ったように見えた。

「文子さんとお話しできて、私の気持ちも伝えられたし、玉子ちゃんの元気な顔も見られた。私のたった一ツ幾ちゃんにしてあげられる御供養が叶えられて嬉しい」

納骨日に^(注1) 菩提寺で再び会う約束をして、友兄さんは帰ってゆかれた。

母は私に、近くの駅まで、

「お送りしなさい」と命じた。

玄関を出て、通りの灯りに足を止めて、

「お母様の前では失礼だから言えませんでした、あなたはお父さんにほんとに似ている、さっき見た時、幾ちゃんに会ったようで、私はどうしていいか解らない程嬉しかった」

そうなのかと思った。不思議な気持ちであった。今までこんなにはつきり父に似ていると言われたことはなかったし、私が父に似ていることを、こんなに喜ぶ人に出会ったこともなかった。それを言っている人は、父に一番近い伯父である。私の父が生きていればこんな感じの人なのかも知れない。小さかった記憶の父は背が高かった。肩を並べれば、友兄さんは私より小柄で、らくにその肩を抱いてかばってあげたい思いを持つ。

「又、会えるお約束が出来たからその日を楽しみにしてますよ、早くお母さんのところへ帰ってあげなさい」

(3) 無理に私を押返す手に力があつた。

何か胸の中に大きな固まりが抜けて空洞ができたような、頼りないような、からっと軽くなったようなものが残った。

母の家に戻ると、さつき私がつけてきたシチューの鍋を母はあたためていた。

「やっぱり三橋さんのいいものを、友兄さんはもっていなさる。ここに来るために、おたねおばあさまがいつも買物をしていらつしゃった和菓子のお店まで行ってわざわざ買物をしてみえたんだよ。母さん一人だって考えて、多すぎないように、でももしあんたのところへ分ければ分けられる数の買物だ。よく行届いていなさるよ。そして随分気を付け障りのない話の仕方をなさって、昔から他の人より情がある方だったけど、久々で会っていい気持ちだった」

と穏やかな顔をしていた。父につながる人に出会って、こんなに親しそうに話す母は珍しかった。

約束当日、寒気が強かったがよいお天気で菩提寺へ向かう車の中で、母は外を眺めていたが、ふと私を見て、

「あんたのお父さんが亡くなって随分経つねえ。あんたにとって三橋さんは何だったんだろう」

と言う。

「そうねえ」

と言って黙った。私にはやはり父というしかない人だが、(4) 母から父は遠くなったなと感じた。

以前にあった疑い、(5) 口惜しさ、諦め、そしてほんの少しの懐かしさ、老いて生な感情が抜けたのか、母は人として大きくなったのか。穏やかではあるが、寂しい気がした。

その後、毎年、友兄さんは立春を過ぎた寒さの底のような季節に、西宮の醸造所から酒粕を取寄せては私の所に届けに見える。しかし、直に母のところを訪れることはせず、私のところに来られても、玄関から上がることはなさらない。会えればもうそれでいいと言う。

友兄さんの心の中は嫁にやった娘が無事なら邪魔になることは何一つするまいと、何かに誓っているように見えた。御自分は申し分のない息子さん一家と一緒に住まわれ、気にかかることは何もない。私の父に頼まれた訳ではないのだろうが、親の縁の薄い弟の娘に対して、ひたすら肉親の持つ情を注いでおきたかったのだろうか。

朝から凍てつく寒さで、山は雪になり、午後にはまちがいなく白いものが降ると思われる日、電話で、前夜、友兄さんは静かに終了^わられ、今夜お通夜と知らせがあった。住いは訪ねたことのない土地で昼過ぎには大雪警報が出たが、私はどうしても友兄さんに、自分から初めて会いに行こうと決めた。横須賀線を終点で降りると、その先は西も東も解らなかった。バスはほとんど不定期運行でタクシーに長い列が出来ていた。

車から足を下ろすと、足首まで雪に埋まる。

下半分雪に埋もれた石の碑があり、雪明りにお寺の山号が刻まれている。それを目当てに奥へ入った。思いがけなく視界が開け、本堂が見えた。電気の光が、閉めた玄関の中からもれている。早くそこへ行きたいという思いと逆に、そのあとの何十歩かは足に鉛をまいたかと思う重さだった。中へ入ると一目で喪主と思われる人が顔を上げた。

「いやあー玉子さんでしょう、この雪の中、申し訳ない。でも来てくださっておやじが喜びますよ」

挨拶を終えるなり、お目にかからせていた言いたいと言った。

祭壇の後ろに廻ってお棺の蓋が胸まで引かれた。白い浄衣はきっちり合せられ、友兄さんのお顔は、ここ何年かの間に見たどの顔より立派だった。改めて、こういう顔の方なのだと思う。

そして生前私に向けられていた顔のいかに柔和で愛情深いものが表れていたかを知った。

雪の中を来た甲斐があった。お通夜のお経が上るまで居たかったが、帰路が思いやられる。

友兄さんのお孫さんの車で駅まで送ってもらった。

乗る人の少い電車に腰を下ろし、寂しさも寂しかったが、お見送りが出来た満足もあった。伯父を見送ったのだが、それが出来なかった父へ、言伝てを托した思いがする。

「母も私も恙なく居ります」

と。

電車に揺られ寒さに体中が固くなっていたのがゆるくほぐれた。東京駅に着くまで、小学校の講堂に流れた(注2) ユーモレスクのメロディーを繰り返し繰り返したどりながら、又一ツ父へのつながりが霞んでいった。

翌朝、珍しいほど積もった雪をかきわけながら母を見舞った。

「あの雪だったけど、(5) たぶんあんたは出かけていっただろうと思ったよ。友兄さんは、三橋さんの兄弟の中では一番穏やかに過されたね、こんなに白く浄められた旅立ちもいいものだよ」

と言う。

(青木玉『帰りがかった家』より)

(注1) 菩提寺に先祖代々の墓を置き、供養を行う寺。

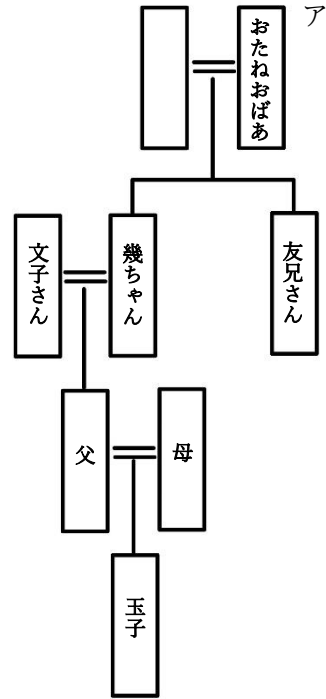
(注2) ユーモレスクに父との思い出の曲。小学校時代に講堂でこの曲を聴き、死期の間近な父を思って涙したことがあった。

問1 本文中の、(a) かいつまんで、(b) 口惜しさ、のここでの意味として最も適当なものを、それぞれ次のアからエまでの中から一つずつ選べ。

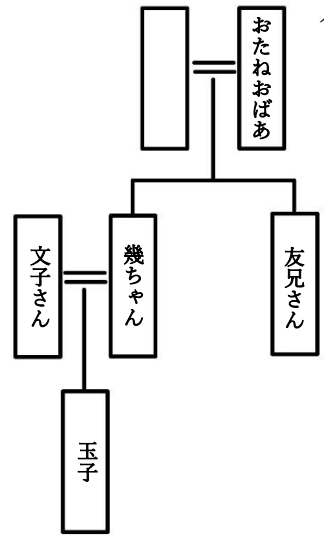
- | | | | | | | | | |
|---|---|--------|---|----------|---|------|---|------------|
| a | ア | 所々大げさに | イ | 要点を抜き出して | ウ | 早口で | エ | 都合の悪い点を伏せて |
| b | ア | 悔しさ | イ | 悲しさ | ウ | 頼りなさ | エ | 腹立たしさ |

問2 この本文に描かれる人物たちの系図として正しいものを、次のアからエまでのの中から一つ選べ。ただし、空欄部分は文中に表現のない人物とする。

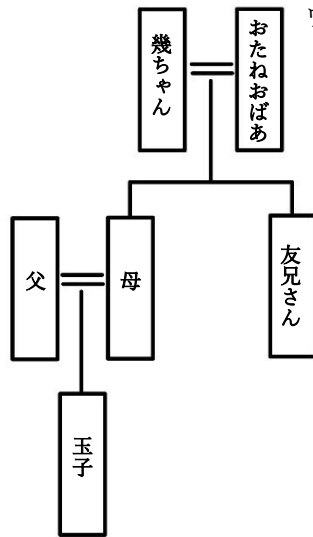
ア



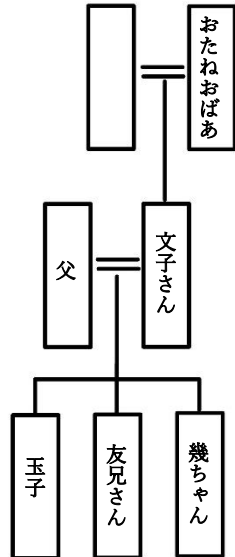
イ



ウ



エ



問3 本文中に、(1)慌ててポケットからハンカチを出して目を押さえてしまったとあるが、この部分の説明として最も適当なものを、次のアからエまでのの中から一つ選べ。

ア 玉子を見て玉子の父を思い出したことで、積年の玉子の父への後悔がよみがえり、涙している。

イ 長い間会うことが叶わなかった玉子との再会を心から嬉しく思い、涙している。

ウ 玉子が想像以上に玉子の父の死に気落ちしているのを見てかわいそうに思い、涙している。

エ 玉子の母が女手一つで立派に玉子を育てたことに対して誇らしく思い、涙している。

問4 本文中に、(2)友兄さんは私を見続けとあるが、友兄さんがこのような行動をとった理由の説明として最も適当なものを、次のアからエまでのの中から一つ選べ。

ア 自分が突然訪れたために玉子を驚かせたのではないかと、玉子に気を遣っているから。

イ 突然訪れた自分に対して玉子が不審に思っているのではないかと、心配しているから。

ウ 玉子と玉子の父が似ていることを嬉しく思い、感慨深さがこみ上げたから。

エ 玉子と玉子の父が似ており、改めて玉子の父を失った悲しみがこみ上げたから。

問5 本文中に、⁽³⁾無理に私を押返す手に力があつたとあるが、この行動の原因となつてゐるものとして最も適當なものを、次のアからエまでのの中から一つ選べ。

ア 玉子の母への氣遣い イ 玉子との氣まずさ ウ 玉子の父へのうしろめたさ エ 友兄さん自身の都合

問6 本文中に、⁽⁴⁾母から父は遠くなつたなと感じたとあるが、この時の玉子の考えの説明として最も適當なものを、次のアからエまでのの中から一つ選べ。

ア 母の父に対する負の感情の増幅は止められず、母は父を忘れようと努力してゐるのではないか、と考えてゐる。

イ 母の父に対する負の感情が薄らぐとともに、父の存在そのものも薄らいでゐるのではないか、と考えてゐる。

ウ 母は父に対する負の感情を浄化させ許容するとともに、適切に父への供養を行おうとしてゐるのではないか、と考えてゐる。

エ 母は父に対する負の感情を良き思い出として塗り替え、父の存在を他人のように扱おうとしてゐるのではないか、と考えてゐる。

問7 本文中に、⁽⁵⁾たぶんあんたは出かけていっただろうと思つたよとあるが、なぜ母はそう考えたのか。その理由の説明として最も適當なものを、次のアからエまでのの中から一つ選べ。

ア 母は玉子が友兄さんに対し柔和で愛情深いまなざしを向けてゐること、そしてそれを友兄さんも受け止めてゐることに気付いてゐたから。

イ 母は玉子が友兄さんに対し父親のような存在として接してゐること、そしてそれを友兄さんも誇らしく思つてゐることに気付いてゐたから。

ウ 母は友兄さんが玉子に対し一心に肉親の持つ愛情を注いでゐること、そしてそれを玉子もきちんと受け止めてゐることに気付いてゐたから。

エ 母は友兄さんが玉子に対し娘のような存在として接してゐること、そしてそれを玉子が友兄さん一家に伝えようとしてゐることに気付いてゐたから。

問8 本文の表現の説明として最も適當なものを、次のアからエまでのの中から一つ選べ。

ア 家庭不和によつてもたらされた主人公の負の感情が、最後まで一貫して刹那的に描かれてゐる。

イ 主人公の何気ない生活の中で起こつた出来事から、さまざまな人物の心情の機微が繊細に描かれてゐる。

ウ 母と強い絆で結ばれた主人公の行動から、友兄さんとの絆へと紡がれる様子が印象的に描かれてゐる。

エ 父の面影を追い求める主人公の姿から、さまざまな人物の間で揺れ動く主人公の感情が断続的に描かれてゐる。